

FD 通信 No. 3

飯田女子短期大学教務委員会

<http://www.iidawjc.ac.jp>

目次

「新任教員研修会の実施－成果と今後の課題－」

①研修会の位置づけ、内容等の概略	教務委員長	松崎行代
②研修会に参加した教員の感想・意見	家政学科	山下紗也加
	幼児教育学科	菱田博之
	看護学科	原典子

「キャリア教育スタート」

①「キャリアデザイン」 報告	家政学科	友竹浩之
	幼児教育学科	黒岩長造
②「キャリア科目座談会」 報告	家政学科	川上恒夫
	看護学科	武分祥子

「新任教員研修会の実施－成果と今後の課題－」

①研修会の位置づけ、内容等の概略

新任教員研修の意義

教務委員長 松崎行代

新年度開始当初、新任教員研修を3回にわけ実施しました。第1回は「飯田女子短期大学の理解」、第2回は「各学科の理解」、第3回は「FDの理解」です。新任教員の方にはこの3回を通し、本学の建学の精神とそれに基づく教育内容や方法、および、各学科の特徴の把握、そして、短大教員として教職にあたるに際しFDの意義や本学のFD活動を理解してもらいました。

この新任研修には2つの目的があります。1つは新任教員のためのものであり、本学の教育や現状について理解してもらい、既存の教員と同じ意識のもと教育活動にあたってもらえるようにすること。また、今、大学教育に求められる教育の質の向上やそのための授業改善への取組み、つまりFD義務化の中での大学教員の責務を理解してもらうことです。

そしてもう1つは、本学の教育改善のPDCAサイクル確立のためです。各学科または学校全体において、自己評価報告書の作成時や必要に応じて評価・改善は実施されていましたが、この研修を年間活動に位置づけることで、定期的なサイクルの中で各部署や学科の評価・改善が行われることになると考えたからです。年度末に評価および改善への取組みが明示され、それを踏まえた内容を4月の新任教員研修で伝えていくというわけです。

現在、学習成果向上への本学の取組みが検討され、カリキュラムマップの作成が進んでいます。そのなかでは、各学科で示された“育てたい学生像”のもと全教員がチームで学生の教育にあたる意識をもち、縦のつながり・横のつながりのなかでのそれぞれの授業の充実が求められます。半期が終了し、新任教員の方もすっかり馴染まれたように思います。今後もさらに、教員の意識統一・連携がとれたなかでの教育の展開を進めていきたいと考えています。

②研修会に参加した教員の感想・意見

新任教員研修「FDの理解」に参加して

家政学科 山下紗也加

今回、新任教員研修「FDの理解」に参加させていただき、FDという言葉は初めて知りました。FDの意味・意義を知ることで、学生への授業の質の向上がいかに大切であるか、初めて考えました。飯田女子短期大学では学科・専攻・コースごとにさまざまな資格を得ることができますが、学生と接したこの4ヶ月の間に、その資格を得ることへの意欲は学生によって温度差があることを実感しました。意欲の高い学生と低い学生が同じ教室にいても教員は一人であり、同じ授業を聞いても学びとれる内容は学生によって異なるだろうと思います。一度きりの授業で、最低限学んでほしいことを全ての学生に求めることができる授業を行うことは難しいことだと思いました。学生にとっては、興味があって選択した授業、単位のために選択した授業、資格のために選択した授業など授業選択の理由は異なり、授業への意欲の偏りは避けられないのかもしれませんが、しかし、そのような中でも、学生の立場になり、学生に理解してもらえそうな授業を行い、それぞれ興味を持って自主的に学ぶことができるよう、教員がサポートしていくことが大切であると感じました。授業を受け持つ前にこのような研修会に参加でき、授業への心構えを考えることができた貴重な時間だったと思います。

FD研修会に参加して

幼児教育学科 菱田博之

今年度4月より高松学園の一員として迎えていただき、私の短期大学における教員生活が始まりました。私自身の今までの職歴や経験を振り返ってみると、現場における実践がほとんどであるため、教育実践については、まさにゼロからのスタートと言っても過言ではありません。そのような中、新任教員研修の一貫としてFD研修に参加した中で、私なりに感じ、考え、理解した点を述べてみたいと思います。

① 短期大学という高等教育機関が置かれた状況

高等教育が大衆化するとともに、高等教育機関を取り巻く状況が大きく変化し、市場原理の導入による他の教育機関との競合の激化、明確（明文化・数値化）な目標設定と、本学に入学し、学ぶことについて（何が学べ、何が身につくのか、どんなキャリアのスタートが切れるか、等）の説明責任が今後ますます要請されるということ。また、高等教育機関自体が変革のうねりの最中にあり、対応を模索している状況であるということ、FD研修を受けることによって理解しました。

② 短期大学における教育：私自身が専門科目を担当するにあたって

時代・社会構造の変化によって、教員と学生との関係性が変化し、権威を持った教員がトップダウンで知識を注入したり、大教室で一斉に教えるようなスタイルから、学生の多様性に合わせて学生の学びを支えていくスタイルへと転換しつつあるという現状を知りました。教員は、専門分野だけを教えればいいということではなく、明確な目標と包括的な視点から、担当分野の教員がどのような学びを提供するのか、あらかじめ全体像を想定しておくことが大切であると学びました。それぞれの科目を縦（教科間）と横（体系的）の有機的なつながりをもっていかにかリキュラムの中に構築し、理念・目標を達成させていくのか、及ばずながら私も模索していきたいと思います。

③ どのような学生を送り出すのか、またどのような人材が求められるのか

単に社会から要請される学生像として、資格や知識・スキルだけではなく、マナーや、相手を慮って対応するコミュニケーション能力も重要視されているということを学びました。学習・対人関係等、自ら取り組む姿勢について消極的な学生も少なからずいる中、学ぶ楽しさ、知る喜びなどを自らの実践で体験し、好奇心、自尊心、情緒安定性を伸ばしていけるような体制づくりが大切であると感じました。机上の学びに限らず、実習・ボランティア・クラブ活動・宗教行事等、様々な人との交流を通して（失敗も含めて）「これだ！」というような体に電流が走るような感情体験を伴った学びの機会をより多く提供できる様に努力してまいりたいと思います。

以上、私が短大教員として、現状をふまえ、短大での教育で何をめざし、どのような学生を社会に送り出していくかということについてFD研修を通して学ぶことが出来ました。教育実践という航海の途中で、羅針盤を失ってしまうような事のないようたゆまず精進してまいりたいと思います。

前期を終えてFDについて考えたこと

看護学科 原典子

2012年4月より飯田女子短期大学の看護学科で勤務することになり、4月着任早々に新任教員研修会に参加させていただきました。3月まで臨床の現場で勤務していた私にとって、研修会での聞きなれない言葉に戸惑いを感じたのは正直なところでしたが、FDにおいて大学教育が質的向上を求められ、教員には学生が主体的に学ぶ状況を作る指導が必要であることを実感しました。

5月からは全く初めての経験である、講義の授業展開を作成すること、そして臨地実習が開始されました。どのような授業を行うと学生は興味を示してくれるのか、ただ一方的に伝えるだけでよいのか悩みながら講義の準備をしました。また臨地実習の場では、看護実践の学びを深めることができる指導について試行錯誤の日々が続きました。

た。

前期の講義・実習を終えたばかりですが、私は次のようなことを感じ始めています。それは、学生が「看護」という分野に興味をもって意欲的に学び続けることができる授業展開を、教員が意識していかなければいけないということです。看護学科の学生は看護師になるという目標達成のために学んでいます。この短期大学で看護師になるために学んだことが、将来の土台になると考えています。「看護」を学び続け、しっかりした知識を持つ学生を社会に送り出すことで、授業の質も評価されるでしょう。そのために教員は授業展開を見直し、常に自分の指導力を振り返ることが必要だと思います。

教育の場で始まったばかりの私の挑戦ですが、多くの先生方や学生とのつながりを大切に、私自身の授業に対する自発的な努力をしていきたいと思っています。

「キャリア教育スタート」

①「キャリアデザイン」報告

キャリアデザインスタート

家政学科 友竹浩之

家政学科のキャリアデザインは、1年生全員126名が合同教室で受講した。オムニバス形式で担当の11名の教員がテキストの内容にそって授業を行い、3名の教員（助手）が授業をサポートした。グループ活動の時は、本館3階の3つの実習室に移動した。

実際に授業をやってみると、「新規科目」、「3専攻合同」「人数の多さ」などで、授業を進めにくい印象であったが、これは学生も同様に感じているようだった。また、グループ活動時の教室移動は時間もかかり学生に不便をかけてしまった。

15回の授業終了後に、アンケートを実施した結果、受講した感想として、「自分の将来を考える良い機会となった」「就職について真剣に考えるようになった」など「キャリアデザイン」の目的を好意的に受け止めてくれた学生の意見がみられた。一方で、「何がさせたいのかわからなかった」や「この授業いらない」など正直な感想を書いた学生もいた。担当教員としては、後者の意見を重く受け止め、来年度に向けて授業改善していきたい。

キャリアデザイン(幼児教育学科)

幼児教育学科 黒岩長造

幼児教育学科のキャリアデザインは、学生が自らのキャリアデザインを10年後、15年後を目安として立てられるように計画した。黒岩、松崎で担当したが、全くの新科目であり、暗中模索の状態であった。

初回から5回目まではシラバス通りに展開させたが、学生の将来を見通す力の無さを痛感し、また明日を考える

ことに意義を見いださない学生（保育士になるだろうからそれでいい、明日はどうなるか分からないから考えても仕方が無い等）もいて、内容の変更を迫られた。

丁度、長野県児童福祉施設大会が県文化会館で開かれたので、1年生全員で出かけ、児童養護施設で働く保育士の日常についての発表を聴講した。聴講レポートの中で、養護施設保育士も視野に入れたいという感想も散見されたが、一度の聴講で進路を変更する危うさも感じた。

更に先輩のキャリアを聴けば、それに触発され、自分の将来設計に取り入れてくれるのではないかと考え、幼児教育学科の教員（高松、草間、北野、庄司、及川、塩原、林、菱田、齊藤）にそれぞれのキャリアの披露を依頼、実施した。また、学科卒業の職員（渡邊）、それ以外の職員（塩沢、壬生）のキャリアも参考になると考え、実施した。教職員の話の振り返りの中で、学生にとっては結構インパクトがあったことが、ディスカッションやレポートよりうかがい知れた。教職員にとっても刺激になったようであった。

終盤の2回を連続して、自分のキャリアデザイン作成に当たさせた。再度、教職員に話を聴きに出かけたり、学生課で過去の求人表を調べたり、実際に行動して立てるよう促した。15回目で、自ら立てたデザインを他の学生全員に向けて発表するという形式をとった。予想では、恥ずかしがり中途半端で終わるかもしれないと思われたが、意外に堂々と発表し、お互いの発表に刺激を受けたようであった。

全てが、初めての授業であったが、学生の印象に残った、教職員のキャリア発表や他の学生のデザインを聴くということ、自ら動いて調べるという形態を残しながら次年度に向かいたい。

②「キャリア科目座談会」報告

キャリア科目座談会報告

家政学科 川上恒夫

今回の話し合いではキャリア科目に対する捉え方や考え方が教員により少し温度差があると感じました。一コマが完結型でないオムニバス授業の場合、個々の教員の個性・価値観とか授業への責任の持ちかたなどが授業効果に大きくかかわってきたのではと、一部の学生の不満アンケートから読みとれます。私の場合、先行週でどの程度理解できているかを把握して講義に臨めば良かったと反省しています。また、教員の数が増えれば増えるほど授業に責任を持つのが難しくなることも生じるのではないのでしょうか。学科や専攻をあげてやらなければならない気持ちは理解できますが、できるだけ少数の教員で担当して、授業の方向性や流れを大切にしていければと思います。

将来の予測が困難になっている今の時代を生きる若者や学生にとって、大学での学修が次世代を生き抜く基盤となるかどうかは切実な問題です。しかし、実際には変化に対応したり未来への活路を見いだしたりする有為な人材の育成を大学に求めるようになっていきます。予測困難という点は、産業界や地域社会も同様ですし、従来の高等教育の場としては国民、産業界や学生は満足していないのも事実です。

例えば朝日新聞社の世論調査では、大学の人材育成に6割超の国民が否定的であったり、日本経団連の調査では、企業ニーズと大学が特に注力している点との隔たりがあったり、学生の5～6割が「論理的に文章を書く力」、「人に

分かりやすく話す力」について大学の授業の有効性を否定的に捉えているといった厳しい調査結果の報告もあります。本学にとって、キャリア科目を重要な科目として位置づけ、学生にとって現時点で価値ある内容に教員同士で練り上げていく必要性を感じました。

キャリア科目 座談会報告

看護学科 武分祥子

今回の「キャリア科目座談会」に参加させていただき、さまざまな側面から前期キャリア科目の総括をすることができました。キャリア科目に関わった先生方が大勢おられたこと、そして互いに相談や試行錯誤しながら、前期のキャリア科目を担当されたことを知りました。このような一緒につくりあげる授業はこれまで少なかったと思いますので、授業内容を互いに考え切磋琢磨する機会としても、キャリア科目の実施は意義があったのではないかと考えます。そして「キャリアデザイン」のようなオムニバスとなる科目では、一つひとつのコマを調整しバランスをとることが困難であったという感想も出ました。確かに前の授業との関連・整合性について、学生にとってはわかりにくく、また教員にとっては難しかったかもしれず、今後の検討課題といえるかもしれません。しかし、どんな内容を盛り込んでいけばよいか学生を軸として担当者が話し合っていける場でもあるので、オムニバスという形式を前向きに捉えれば今後の内容発展も期待できます。

私は「地域社会学」を担当し、受講生に合わせてシラバスを変更しつつ15コマの講義を行いました（特別講師2回含む）。また家政・幼児教育学科の「基礎コミュニケーション」にも2コマ関わらせていただきました。これまで私は看護学科の講義が中心でしたが、家政学科や幼児教育学科の学生さんと関わりが持てたことや講義を通じていろいろ知り得たことは、教員として大変勉強になり刺激にもなりました。それぞれの学科の状況や持ち味を考えつつ、学生にとって有意義な講義を学生とともに作りあげていきたいと考えようになりました。

後期にもキャリア科目がありますが、以上のような前期の総括を基盤にしながら準備を進めていきたいと思います。

編集後記

多くの先生方のご協力により、FD通信第3号の発行に至りました。原稿を依頼した先生方には、お忙しい中にもかかわらず迅速に対応していただき、ありがとうございました。この通信が短大全体・各教員のFDへの取り組みを知る機会になるとともに、学生に授業の質の向上という形で還元していただけたら幸いです。

（幼児教育学科 及川直樹）

飯田女子短期大学 FD 通信 No.3 （発行日 2012 年 8 月 31 日） 編集担当 教務委員会

委員長 松崎行代

委員 伊藤洋子 岩崎みずず 及川直樹 小笠原京子 黒岩長造 近藤民恵 庄司洋江 友竹浩之 脇坂幸子

※FD 通信へのご意見・ご感想をお待ちしております。 fd@iidawjc.ac.jp